

ムズイア時評



安立 清史 九州大学大学院教授
(共生社会学)

若者論は難しい。しかし、極めて重要である。そのことを考えさせてくれる記事に出合った。

新聞の若者論は二つに分かれる傾向がある。一つは問題提起的に若者を批判するもの。ネット時代の若者の思考や行動を批判した毎日新聞6月4日夕刊「特集ワイド」がその典型だ。もう一つは、経済危機や生きにくい社会で苦闘する若者たちの行動や心の内側を理解しようとするものである。6月7日「く

生きづらい30歳代をも、あえて広く「若者」ととらえ、教養子の大学生たちと「若者目線」で考えてみた。

第一に、「若者」は若者論に批判的である。若者論は社会の問題や負の部分若者に投影して批判する傾向がある。しかし、今の社会を作ったのは、自分たちよりも年上の「大人世代」なのだ。若者はそこに目標と自信を見失った大人たちの責任転嫁を敏感に感じ取る。だから大人世代の自己批判を欠いた若者論は反発と反感しか生み出さない。それでは若者をますます新聞から遠ざけてしまう。

第二に、「若者」を「外国人」と読み替えたらどうだろう。若者を高飛車に批判する姿勢は、異質な他者を排除し差別する視点につながりかねない。現代は異なる価値観や行動様式をもつ人たちを理解し共存しなくてはならない時代である。若者論と国際化論は本質的なところで共通している。相互の偏見や無理解を乗り越えなくてはならない。新聞にとって、若者を理解することは21世紀の試金石でもある。

第三に、世代を超えた相互理解は可能だろうか。「大人世代」が経験したことのない世界を若

者たちが生きていることを「リアル30s」の記事は示した。ここからもう一步踏み込み、相互理解のための足場を作る必要がある。大人世代が理解するだけでは足りない。若者側からの理解へ向けた手助けが必要となる。新聞が、相互理解のための共通の土俵に脱皮できるかどうか、大きな課題だ。

この10年間の若者論を振り返ると、大人世代から見た表面的な違いを取り上げ、一方的に批判する傾向があった。「リアル30s」同様、それを超えて、10代、20代の若者を含めた若者たちの心や行動を内側から理解させてくれるような報道を重ねてほしい。相互理解の糸口はそこから見えてくるような気がする。

(西部発行紙面を基に論評)

若者と大人 相互理解の「土俵」に